

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：34445

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530844

研究課題名(和文) 養育者の働きかけ行動と子どもの言語発達

研究課題名(英文) Maternal input as predictors of children's early language development

研究代表者

小椋 たみ子 (OGURA, TAMIKO)

大阪総合保育大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：60031720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：子どもの言語発達に有効な働きかけ行動を母親の言語入力(社会・実用的特徴、身振り、音声模倣)の観点から明らかにした。子どもの年齢により言語発達に有効な働きかけは異なっていた。2歳の子どもの表出語数にプラスの効果がある働きかけは9ヶ月児では発話に身振りを伴わせること、共同注意中の提示の身振り、12、14ヶ月児の共同注意中の子どもの注意・関心にそった叙述発話、14ヶ月児の共同注意中の指示・命令、相槌であった。母親の言語入力(社会・実用的特徴)は言語出現期に有効であった。言語出現後では、子どもの発話の母親の模倣は感嘆詞の繰り返しや助詞・助動詞の拡充模倣が33ヶ月の子どもの言語発達にプラスの効果があった。

研究成果の概要(英文)：The present study clarified the beneficial maternal input for children's language development from three points; maternal speech acts, maternal gestures, and maternal verbal imitation. The effective maternal input varied according to the age of the children. First follow-in descriptions at 12 and 14 months, follow-in command and backchannels at 14 months were positively correlated with children's expressive vocabularies at 2 years old. Second follow-in presentation gesture predicted children's expressive vocabularies at 2 years old. These results showed the joint attention between child and mother at the beginning of single utterances will have beneficial effects on subsequent vocabulary development. Third predictive maternal verbal imitation for children's lexical development at 33 months was repetition of interjections at 24 months. Mother's imitative expansion for particles and/or suffixes at 21 months promoted grammatical development at 33 months.

研究分野：発達心理学

キーワード：養育者の働きかけ 言語発達 共同注意 発話機能 身振り 音声模倣

1. 研究開始当初の背景

養育者はことばを習得しはじめた子どもがことばの機能、語意、統語的規則を発見しやすいようにさまざまな手がかりをあたえ、ことばの獲得の足場となるコミュニケーションの場をつくっている。Bruner(1983)はことばの獲得の過程についての主張の中心に社会的な相互作用を重視し、言語獲得援助システム(language acquisition support system: LASS)が人間には備わっていると述べている。子どもが生得的にもつ能力を引き出すように、環境からの刺激を養育者が調整することにより、言語獲得がなされていく。子どもは大人の視線や表情を手がかりとして大人の発話の意図を推測し、語意学習をしている。子どもと大人、そしてこの2人が注意をともに向けている事物の三項により構成される共同注意の成立は言語獲得の基盤となる。言語獲得の基盤としての共同注意の重要性は沢山の研究者により提言され、実証的データの蓄積も行われてきた。Tomaselloら(1983; 1986)は子どもが既に焦点をあてているものに母親が言及することが子どもの語彙発達を促進し、子どもの注意を転換する発話とは負の相関があることを示した。Akhtarら(1991)は共同注意中の行動や発話を方向づける指示・命令の発話は必ずしも負の効果だけではないことを13ヶ月児の母親の言語入力と22ヶ月時点の子どもの語彙数の正の相関から明らかにした。Masurら(2005)は10ヶ月時点の母親の行動評定での応答性と支持的な指示・命令が13ヶ月の子どもの語数を正に予測、13ヶ月時点では発話での応答性(音声模倣)、支持的な指示・命令が17ヶ月の語数を正に予測、強圧的な指示・命令は表出語数を負に予測、17ヶ月時点の母親の行動評定と発話の応答性と行動評定での支持的な指示・命令が21ヶ月時点の子どもの表出語数を正に予測、母親の強圧的な指示・命令の発話は表出語数を負に予測したことを報告している。

以上の研究は養育者と子どもの共同注意と共同注意中の応答的発話が子どもの言語発達を促進し、強圧的な指示・命令発話は言語発達に負の効果があるとしている。本研究において、日本の母子を対象として母親のどんな働きかけが子どもの言語発達を促進するのを明らかにする。

2. 研究の目的

(1) 母親の子どもへの働きかけ行動のうちの発話機能の年齢推移とその後の語彙発達との関係を明らかにする。

(2) 母親の働きかけ行動の身振りの年齢推移とその後の語彙発達との関係を明らかにする。

(3) 母親の子どもの発話の模倣の種類と年

齢推移、及びその後の言語発達との関係を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 対象児：①母親の働きかけ行動：赤ちゃん研究に応募してくれ、24ヶ月追跡時点のデータがある9ヶ月25名、12ヶ月児24名、14ヶ月児26名、18ヶ月児25名の計100名。

②音声模倣：33ヶ月追跡時点のデータがある18ヶ月児14名、21ヶ月児19名、24ヶ月児14名の計47名。

(2) 手続き：大学の観察室で母子の一定のままごとと遊具での自由な5分間の遊びを2方向より録画した。子どもの言語発達指標は母親へ日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)への記入を依頼した。9、12、14、18ヶ月は「語と身振り」版、21ヶ月、24ヶ月、33ヶ月は「語と文法」版の表出語数、助詞・助動詞数を算出した。

(3) 分析方法：①母親の発話機能：録画データを再生し、トランスクリプションを作成し、以下の測度を算出した。a. 発話数：5分間に母親が発した全発話数をカウントした。b. 方略(共同注意/非共同注意)：子どもがすでに注意を向けている事物、事象、活動に添った共同注意中に発せられた発話数、子どもの注意・関心に添わない非共同注意状況で発せられた発話数、その他(共同注意中、非共同注意中に分類不可)に分類した。c. 発話機能：ここでは、質問(子どもに何らかの反応を求めて発せられた疑問形の発話)、指示・命令(子どもに何らかの行動をさせるための発話)、説明(形状・状態・動作などについての説明)、相槌(子どもの行為や発話に同調したり、特に意味はなくてもコミュニケーションを円滑にするような発話)の4つの機能を取りあげた。質問、指示・命令、説明は方略で述べた共同注意中、非共同注意中別の発話機能の頻度と母親総発話数に占める割合を算出した。相槌は共同注意中、非共同注意はこみにして頻度を算出した。

②母親の身振り：a. 身振り数、身振りに伴う発話数、発話に伴う身振り数、b. 方略別身振り種類：共同注意中と非共同注意中別に、提示(子どもの視野の中に玩具を置く)、例示(子どもに玩具を提示しながら、玩具を操作してみせる)、手渡し、指差し、さらに本研究で追加した、子の身体への働きかけ(子どもに触れる、子どもの身体を動かす等。以下、身体と略記)、その他(手をたたく、床をたたく、うなずきなど)に分類し、頻度を算出した。c. 各身振りに伴う発話機能(質問、説明、指示・命令)の頻度を算出した。

③音声模倣：Masur & Rodemaker(1999)の模倣の定義に従い、子のモデル発話(感嘆詞だけ、語・文)のあと15秒以内にfollowされる子のモデル発話の一部を含む母親の発話を模倣発話エピソードとみなした。模倣エピソード

ードは他の発話、活動の新たな開始により終了とした。個々の母親の模倣発話の種類、模倣の内容を以下のように分類した。

a. 種類：子どもの発話の一部（モデル）を含む以下の母親の模倣をカウントした。

繰り返し（発話（感嘆詞、語、文）の繰り返し）、拡充（モデルの発話に感嘆詞 and/or 語 and/or 助詞・助動詞を拡充する）、縮小（モデルの語を含む発話から感嘆詞 and/or 語 and/or 助詞・助動詞を省略する）、拡充+縮小（モデルの語を含む発話に上記の拡充、縮小の両方がある）

b. 種類（繰り返し、拡充、縮小）×内容（感嘆詞、語、助詞・助動詞）：拡充+縮小については発話を分解してカウントした。1つの発話でいくつかの語、助詞・助動詞が拡充（縮小）されても語拡充（縮小）1、助詞・助動詞拡充（縮小）1とカウントした。感嘆詞繰り返し、感嘆詞拡充、感嘆詞縮小、語・文繰り返し、語拡充、語縮小、助詞・助動詞拡充、助詞・助動詞縮小の頻度をカウントした。

4. 研究成果

(1) 母親の発話機能

①母親の発話機能の年齢推移：共同注意中と非共同注意中の母親の質問、指示・命令、説明の頻度の年齢推移を図1に示した。

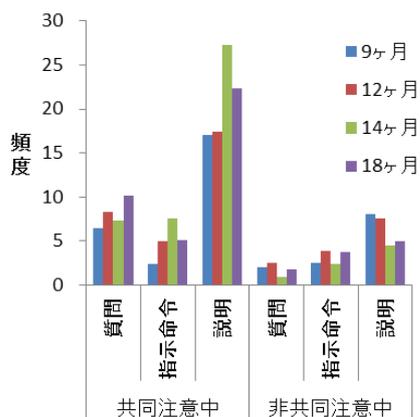


図1 共同注意中、非共同注意中の母親の発話の年齢推移

共同注意中発話は非共同注意中発話よりも有意に母親の発話が多く、発話機能の出現頻度は説明 > 質問 ≒ 指示・命令の順であった。また、共同注意中は説明、質問、指示・命令の順で、非共同注意中は説明、指示・命令、質問の順で頻度が減少した。発話機能は共同注意中、非共同注意中で年齢効果が異なっていた。質問は共同注意中は年齢差がなかったが、非共同注意中は12ヶ月児は14ヶ月児よりも多かった。指示・命令は共同注意中は14ヶ月児が9ヶ月児よりも高かった。非共同注意中は年齢差がなかった。説明は共同注意中は14ヶ月が9ヶ月、12ヶ月よりも有意に高かったが、非共同注意中は9ヶ月で14ヶ月、18ヶ月よりも有意に高く、また、12ヶ月で14

ヶ月よりも有意に高かった。

大学でのままごと遊びの母子のやりとり場面の観察なので、母親は子どもの注意関心に寄り添い、子どもの活動や子どもが関心をもったことを説明する発話が多かった。特にことばが出現する14ヶ月で共同注意中の説明が高かった。

②2歳時点の語彙発達を予測する母親の言語入力

a. 母親の応答的発話と指示・命令発話：9、12、14、18ヶ月の母親の共同注意中と非共同注意中の質問、説明、指示・命令の頻度を算出し、子どもの観察時点の表出語数を一定にし、2歳時点の子どもの表出語数との偏相関係数を算出した(表1)。観察時点12ヶ月、14ヶ月で母親が子どもが注意している事物や活動について説明することが2歳時点の表出語数を正に予測していた。また、14ヶ月時点で母子の共同注意中に母親が子どもに指示命令を与えることも2歳時点の表出語数と正の偏相関があった。この結果は、子どもと注意を共有することの重要性、子どもが注意関心をはらっていることを叙述、説明すること(たとえば、子どもがスプーンを口にいたら、母親が「スプーンお口にいられたの」という)が子どものことばの発達にプラスの効果があること、また、必ずしも指示命令は子どもの言語発達に負の影響を与えるのではないことを示しており、Akhtar et al. (1991)やMasur et al. (2005)の結果と一致していた。

表1 母親の発話機能と2歳時点の子の表出語数の偏相関

方略	機能	9ヶ月	12ヶ月	14ヶ月	18ヶ月
共同注意中	質問	-.174	-.344	.356	-.148
	指示	-.130	-.009	.466*	-.268
	説明	-.195	.468*	.434*	-.310
非共同注意中	質問	-.302	-.242	-.183	.112
	指示	-.187	.175	.167	.008
	説明	-.105	.055	-.014	-.107

* $p < .05$ 偏相関係数は観察時点の表出語数を制御

b. 母親の発話スタイルと子どもの語彙発達：各観察時点の母親の全発話数に占める質問、指示・命令、説明の割合と24ヶ月の子どもの表出語数の偏相関(観察時点の子の表出語数を制御)をみると12ヶ月児で共同注意中の母親の質問と24ヶ月の表出語数との偏相関が負の相関、12ヶ月児で共同注意中の母親の説明と24ヶ月の表出語数との偏相関が正の有意な相関があった。他の月齢、他の発話機能は有意な偏相関はなかった。説明については頻度と同じ結果であったが、12ヶ月のことばの出現期に質問の占める割合が高いこと

は子どもの語彙発達には負の影響を及ぼしていることが明らかとなった。Bruner(1981)は母子の会話において母親は子どもが問題解決を援助する方法のひとつとして、子が課題遂行をする上で自分でコントロールしなければならない自由度を減じてやることを挙げ、それを「足場作り」と呼んでいる。Murase(2014)はこの「足場作り」の観点から子どもに情報を請求する質問は情報を与える発話よりも足場を与えていない。手がかかりは与えているが具体的な情報を与えていないので、子どもにとっては子ども自身がコントロールしなければ自由度が高すぎるとしている。前言語期、言語出現期の子どもへの質問は語彙発達には負の影響があると考えられる。

③母親の相槌発話と子どもの語彙発達：共同注意中、非共同注意中をこみにした相槌の頻度、及び母親の総発話数に占める割合は表出語数が急増する18ヶ月が他の年齢より高かった。14ヶ月時点の母親の相槌は24ヶ月時点の表出語数を予測していた。相槌は相手の発話や行動に共感する時に発せられる。意味語が増加する14ヶ月で子どもの発話に相槌をうちコミュニケーションを続けることが重要であることが示唆された。

以上、有意味語が出現する12ヶ月、14ヶ月時点の母親の発話で子どもが注意関心をはらっていることの説明や相槌は子どもの2歳時点の子どもの語彙発達に正の影響を与えることが明らかになった。

(3) 母親の身振りでの働きかけと子どもの言語発達

①年齢別身振り頻度：身振りの出現頻度の年齢推移を図2に示した。出現頻度は12ヶ月≒9ヶ月>14ヶ月≒18ヶ月で、14ヶ月以降は身振りの出現が12ヶ月以前に比べて減少した。身振りの種類は例示>提示>その他≒指差し>手渡し≒身体で例示が一番高かった。共同注意中、非共同注意中の母親の身振りの出現頻度は差がなかったが、提示は非共同注意中の出現頻度が共同注意中より有意に高かったが、例示、手渡し、指差しは共同注視中のほうが非共同注意中よりも頻度が高かった。非共同注視中の提示、例示では12ヶ月児が14ヶ月よりも有意に高く、共同注意中の身体、非共同注意中の身体は9ヶ月児が12ヶ月、18ヶ月よりも有意に高く、共同注視中の指差しは14ヶ月児が9ヶ月、12ヶ月よりも有意に高かった。母親は前言語期において身振りでの働きかけが多かった。また、ままごと遊びの場面であったので、母親は事物の扱い方をみせる例示の頻度が高かった。

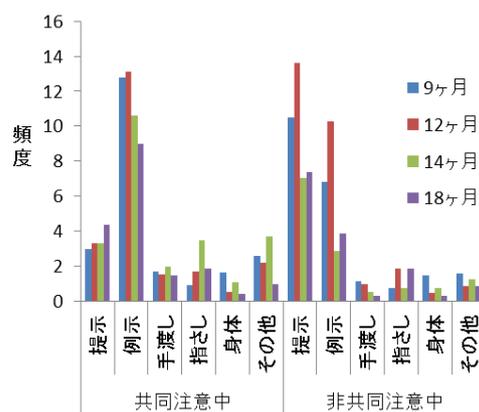


図2 身振りの年齢推移

②身振りに伴う発話率と発話に伴う身振り率：身振り発話随伴率（発話を伴う身振り数/身振り総数）は年齢間で有意差はなく、全年齢の平均は91.4%で殆どの身振りは発話を伴っていた。発話身振り随伴率（身振り数/発話総数）は9ヶ月($M = 72.3, SD = 77.3$)、12ヶ月($M = 49.4, SD = 10.9$)、14ヶ月($M = 46.8, SD = 10.9$)、18ヶ月($M = 37.8, SD = 11.7$)で、9ヶ月児が18ヶ月児よりも有意に発話の身振り随伴率が高かった。

③母親の身振りでの働きかけと子どもの言語発達：9ヶ月時点の発話に伴う身振り率は24ヶ月時点の表出語数と相関(.501)、観察時点の表出語数を制御しても有意な相関があった(.499)。特に9ヶ月で共同注意中に事物を提示する身振りと24ヶ月時点の表出語数の相関が.453、表出語数を制御すると.431であった。身振りには発話を伴っていることが多いので、身振りに伴う発話機能と語彙発達の関係をみた。9ヶ月の共同注意中の提示に伴う発話の相関、偏相関は、質問と24ヶ月表出語数の相関は.397で有意な相関あったが、表出語数を一定にすると有意な相関はなかった。前言語期の母親の身振りに伴う発話の効果ではなく、提示の身振りが子どもの言語発達にプラスの効果を及ぼしていると考えられる。

(4) 母親の模倣発話と子どもの言語発達

①母親の模倣発話の年齢推移：繰り返し、拡充、縮小、拡充+縮小の4種類の模倣の頻度の年齢推移を図3に示した。

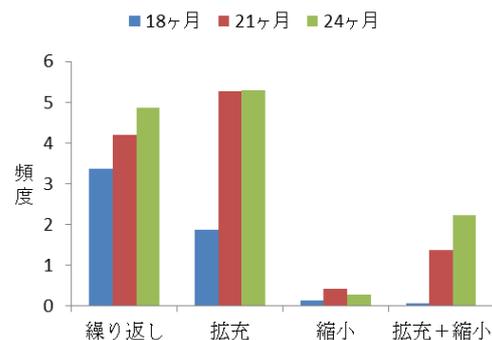


図3 母親の言語模倣の4種類の年齢推移

子の発話がモデルである母親の模倣の平均頻度は繰り返し≧拡充>拡充+縮小>縮小の順で、24ヶ月、21ヶ月児の模倣の頻度の平均は18ヶ月よりも有意に高い傾向があった。

②**模倣内容**：繰り返し、拡充、縮小（拡充+縮小は拡充と縮小に分解）の模倣の種類と感嘆詞、語・文、助詞・助動詞の内容と組み合わせの年齢毎の頻度を図4に示した。繰り返しでは、語・文の繰り返しが感嘆詞の繰り返しより多かった。年齢の差はなかった。拡充では、助動詞≧語>感嘆詞の順であった。また、24ヶ月は18ヶ月児よりも有意に模倣発話頻度が高かった。さらに、18ヶ月では模倣の内容の頻度で有意な差はなかったが、21ヶ月では助詞・助動詞>語>感嘆詞で、24ヶ月では語≧助詞・助動詞>感嘆詞で年齢により拡充の内容は異なっていた。縮小では内容、年齢の有意な主効果はなかった。

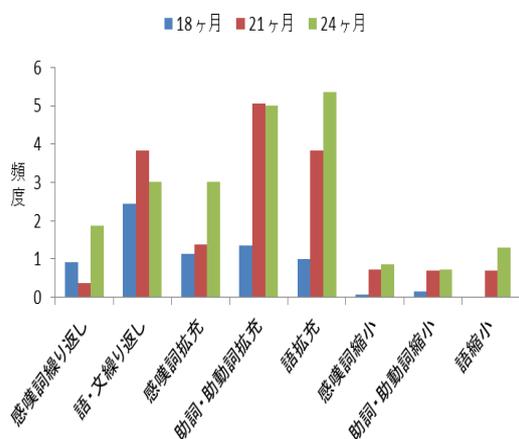


図4 母親の言語模倣の内容・種類の頻度

18ヶ月児ではまだ表出語数も少なく、モデルとなる子の発話が少ないが、21ヶ月は語急増期、文法出現期であり、モデルとなる子の発話数が多くなり、母親の模倣発話数は18ヶ月に比べ、21ヶ月で有意に上昇していた。模倣の種類は子のモデル発話の繰り返しや拡充が多かった。また、模倣の内容は語や助詞、助動詞の模倣が感嘆詞の模倣に比べ、有意に多かった。

③ **母親の言語模倣と子の言語発達**：追跡時点33ヶ月での子の言語発達と観察時点18、21、24ヶ月の母親の子のモデル発話の模倣の関係は観察時点の表出語数を制御すると、24ヶ月観察時点の母親の繰り返し模倣発話が表出語数と有意な相関があった。観察時点の表出語数を制御した模倣種類・内容と33ヶ月時点の表出語数の偏相関係数を表2に示した。24ヶ月で感嘆詞の繰り返しが33ヶ月時点の表出語数を予測した。また、21ヶ月時点の助詞・

助動詞の拡充が33ヶ月時点の助詞・助動詞数と.403の有意な傾向の偏相関が（観察時点の助詞・助動詞数制御）あった。母親が子が言ったことに相槌をうち、会話をつづけることが子の語彙発達にプラスになることを示している。また、21ヶ月時点での母親の助詞・助動詞の拡充模倣が33ヶ月追跡時点の文法発達を予測したことは、母親が子の非文法的な発話に対し、negative evidenceを与えることが子の文法発達に寄与していることを示しているといえる。

表2 母親の模倣の種類と子どもの言語発達

	33ヶ月偏相関(観察時点語数制御)		
	18ヶ月	21ヶ月	24ヶ月
語拡充	-.303	.28	.322
語縮小		-.267	.32
語繰り返し	-.009	.067	.294
感嘆詞拡充	.134	-.286	.057
感嘆詞縮小	.439	.122	.454
感嘆詞繰り返し	-.073	.142	.731**

以上、母親の子どもへの働きかけにおける発話機能、身振り、母親の子どもへの発話の模倣をとりあげ、子どもの言語発達との関係を明らかにした。子どもの言語発達に有効な養育者の働きかけは子どもの年齢により異なっていた。前言語期から言語出現期においては子どもの注意、関心に添った叙述の発話や身振りを伴った発話が2歳時点の言語発達に有効であることがあきらかとなった。母親の発話機能とその後の語彙発達に影響を与えるのは12、14ヶ月で、語彙が出現している18ヶ月では母親の発話機能はその後の言語発達に影響を与えていなかった。この結果はHoff & Naigles(2002)の21ヶ月児では、養育者の社会—実用的な側面よりも発話の複雑さの量的側面が語彙発達の予測要因であるとの報告とも一致しており、今後、母親の発話の複雑さの量的測度の分析をする予定である。また、母親の言語入力や子どもの言語発達に及ぼす要因として子どもの気質や養育環境との関係などを明らかにすることが課題である。本研究は計100名の母子の観察と追跡により言語発達に有効な母親の言語・非言語の入力を明らかにした研究であり、基礎研究としてだけでなく、育児、療育にも貢献できる研究である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①小椋たみ子、乳幼児期の気質の一貫性、査読無、帝塚山大学現代生活学部紀要、11、

2015、65-74

- ②小椋たみ子、前言語期から文法出現期の子
どもへの養育者のことばと身振りでの働き
かけ、査読無、帝塚山大学現代生活学部紀
要、10、2014、109-121

[学会発表] (計 17 件)

- ①小椋たみ子・増田珠巳・平井純子・浜辺直
子、母子遊びでの母親の相槌発話と子ども
の言語発達、日本赤ちゃん学会第 16 回学術
研究集会、2016 年 5 月 20 日、同志社大学
- ②小椋たみ子・増田珠巳・平井純子・浜辺直
子、母親の身振りでの働きかけと子どもの
言語発達、日本発達心理学会第 26 回大会、
2016 年 4 月 29 日、北海道大学
- ③小椋たみ子・増田珠巳・平井純子・浜辺直
子、生後 2 年目における母親の言語模倣と
子どもの言語発達、日本言語科学会第 17 回
年次国際大会、2015 年 7 月 18 日、別府国
際コンベンションセンター
- ④小椋たみ子 母親の働きかけとことばの発
達 (公開シンポジウム “科学で考える”
お母さんと赤ちゃんの大切な関係) 日本
赤ちゃん学会第 15 回学術集会、2015 年 6
月 28 日、かがわ国際会議場
- ⑤Ogura, T., Masuda, T. Hirai, J., & Hamabe,
N. Mother's verbal imitation in the
second year as predictors of children's
linguistic development, 2015 SRC
Meeting, March 21, 2015, Pennsylvania
Convention Center, U.S.A.
- ⑥平井純子・小椋たみ子・増田珠巳・浜辺直
子、12、18 ヶ月児の母子の絵本読み場面
における母親の働きかけ行動、日本発達心理
学会第 26 回、2015 年 3 月 20 日、東京大学
- ⑦小椋たみ子・平井純子・増田珠巳・浜辺直
子、母親の音声・言語模倣と子どもの言語
発達の関係、日本教育心理学会第 56 回総会、
2014 年 11 月 9 日、神戸国際会議場
- ⑧小椋たみ子・浜辺直子・増田珠巳・平井純
子、母子相互交渉における音声・言語模倣、
日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 10
日、同志社大学
- ⑨Ogura, T., Masuda, T., Hirai, J., &
Hamabe, N. Social pragmatic features of
maternal input and children's early
language development, Developmental
Section Annual Conference 2014, British
Psychological Association, September 3,
2014, Hotel Casa 400, Amsterdam,
Netherlands.
- ⑩小椋たみ子・増田珠巳・平井純子・浜辺直
子、2 歳の言語発達に関連する 9、12、18
ヶ月の母親の発話機能、言語科学会第 16 回
年次国際大会、2014 年 6 月 29 日、文京大
学
- ⑪小椋たみ子・浜辺直子・増田珠巳・平井純
子、子どもの音声模倣に対する母親の反応
と子どもの言語発達、日本赤ちゃん学会第
14 回学術集会、2014 年 6 月 21 日、日本女

子大学

- ⑫小椋たみ子・増田珠巳・平井純子・浜辺直
子、語彙、文法発達を予測する母親の言語
入力、日本発達心理学会第 25 回、2014 年 3
月 21 日、京都大学
- ⑬小椋たみ子・平井純子・浜辺直子・増田珠
巳、母親の非共同注意中発話への子の
redirect 反応と言語発達の関係、日本教育
心理学会第 55 回総会、2013 年 08 月 18 日、
法政大学
- ⑭小椋たみ子・浜辺直子・平井純子・増田珠
巳、前言語期から文法出現期の子への母親
の身振りでの働きかけ、日本赤ちゃん学会
第 13 回学術集会、2013 年 05 月 26 日、ア
クロス福岡
- ⑮小椋たみ子・浜辺直子・平井純子・増田珠
巳、母親の言語入力の年齢推移と子どもの
言語発達、日本発達心理学会第 24 回大会、
平成 25 年 3 月 17 日、明治学院大学
- ⑯小椋たみ子・増田珠巳、乳幼児のカテゴリ
化能力と語彙発達—遂次触課題を用いて—、
日本心理学会第 76 回大会、2012 年 9 月 13
日 専修大学
- ⑰Ogura, T., & Masuda T. Early
categorization ability and vocabulary
development, International Society on
Infant Studies, June 8, 2012, Hilton
Minneapolis, U.S.A.

[図書] (計 4 件)

- ①Ogura, T., & Murase, T. The role of
cognitive bases and caregiver's speech
in early language development. In
Masahiko Minami (Ed.) Handbook of
Japanese applied linguistics. 2016,
17-41. De Gruyter Mouton. Berlin.
- ②小椋たみ子・綿巻徹・稲葉太一、日本語マ
ッカーサー乳幼児言語発達質問紙の開発と
研究、2016、331頁、ナカニシヤ出版
- ③小椋たみ子・小山正・水野久美 乳幼児期
のことばの発達とその遅れ、2015、247頁、
ミネルヴァ書房
- ④小椋たみ子、第 9 章赤ちゃんのことば、小西
行郎・遠藤利彦 (編)、赤ちゃん学を学ぶ人
のために、2012、192-211、世界思想社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小椋 たみ子 (OGURA TAMIKO)

大阪総合保育大学・児童保育学部・教授
研究者番号：60031720